

一月九日

何故か眠れず、三時半に起きてしまう。眼の前に一枚ペーパーがあつて一月八日付で進行中のプロジェクト・リストである。全てこなせたら、一つ上の水準に到達できるのかも知れぬが、我ながら困難だと思うね全く。どうなる事やら。でも、マアやるしかないだろう。

九時過研究室。向井相談。森川図面チェック。十一時前研究室発。十二時五反田TRC・トモ・コーポレーション。社長、専務、物流コンサルタント、打ち合わせ。昼食を喰べながら。十四時途中で抜けて、品川駅迄タクシー。十四時半こたまで伊豆蓮台寺へ。私のスタッフは皆イイ奴なんだが、皆一様に人間関係に弱い。竹の如く、しなつて平気で復元する様な資質を育てて欲しい。竹林の竹が皆ポキポキ折れてしまつては、それを一つ一つ立て直してゆく私の労力は異常なものになつてしまう。今、伊豆急下田、伊東を過ぎたところ。今朝の不眠がたたつて、猛烈に眠い。十七時蓮台寺、わざわざハンマが迎えに出てくれてイヤイヤと言つ事になった。お互いにケガをしてから初めての再会である。ハンマのケガは私の軟弱なモノと違つて、大変ハードなモノだったが、一見手は元に戻り、小さなホウタイだけが残るだけでホツとした。伊豆の古い友人達は皆、顔を見るだけでホツとするのが救いだ。松崎町まで四十五分程の道中、積る話を色々。十八時四〇分頃サンセットヒル松崎にとり敢えずチェックイン。いつもの下宿部

屋で落ち着く。十九時過森秀己町長公室長迎えに来てくれて共に賀茂村へ。賀茂村鈴木敏文宅へ。敏文の父親鈴木文治郎（九十一才）の葬儀の会へ。魚港安良里の小さな路地をくぐり、小さな燈りに導かれて敏文の家へ。私は実ワ、一度も敏文の亡くなった父親、文治郎さんにはお目にかかった事がない。祭壇の壇上に置かれていた写真で初めてお目にかかった。それでも、ここまで来て良かったと思う。次々と顔見知りの顔が現われる。同様に東京から駆けつけた渡辺さん、昔馴染みのシゲル、法一、その他役場の面々皆、二十年來の知己である。オツ、ワザワザ来たか東京からと言つ様な顔をするだけの触れ合いだったが、満足であつた。敏文とは二言三言何か言い交わしただけであつた。松崎町に戻り森さんと久し振りにうなぎの三好へ。お酒二本とうなぎ、その他食し、心地好し。サンセットヒル松崎帰着二〇時半頃。二十一時十五分温泉にたつぷりつかつて休む。

一時目が覚めてしまい、温泉へ。やりたい事、やらねばならぬ事は沢山あるのに、できている事は余りに少ない。慄然とする。二〇年前の伊豆の友人達と昨夜会い、月並みだが皆それぞれに年を取つて、小じんまりしていたり、かしこそうになつていたり、それでも若い頃の面影だけは皆残していたりで、敏文の父親の通夜を介して、二〇年の才月を実感した。生老病死は避けられぬ宿命だが、その余りの酷薄さを知るばかりだ。友人達の眼にも私がそのようにして、姿を焼き付けられたのだろうことも実感した。他人の眼の中に居るそういう姿のもう一人の自分とも道連れにやっついていかねばならないのだろう。世田谷村の屋上菜園を再び手を入れ始めよう。しかし、偶然な事ではあつたが、建築の仕事を選んでいて本当に良かった。作っているモノも、作り終えたモノも

全て古い友人の様なモノなんだ。建築だって永遠からは程遠い。多分人間の一生と、それ程ちがいが無い寿命なのだろう。日々刻々とその相貌を変化させている。建築を成立させている場所も刻々と変化している。その変化の速力の落差を調整するのが設計という事なのだろう。時間は空間を包み込んでいる。宇宙の実体は時間そのもの、変化、動き、無限の多様さに一瞬垣間見る系統の如きもの、それを観相し得たという実感の如きものの連続にあるのではなからうか。今という時間も又、歴史という一見固形の如くに見える計測器に測られている現実なんだな。墓地は実は、実ににぎやかな祭場なのか。今、生きて、動いている現実、アンリアルな、自分で見ているだけの時間の断片に過ぎないのかも知れない。我々の妙に変なのは、葬儀という儀式を必ず行う事。そして死者を荘厳し、そこに束の間の死者の華やいだ空間を演出しようとして、し続けている事。生まれる時は病院で、実にドキュメンタルに生まれ、死ぬ時は妙な空間に彩られて死ぬって事だ。寺院や聖堂の根拠はそこに在る。建築の母体は墓なのか、墓が聖堂になる形式の変化を我々は様式と呼んできたのか。要するに死という人間の生の変化の一定体の事実を。今は直視せざるを得ない。そういう時代であろうか。二時半、もう想は膨らむばかりになった。断って休もう。